

書名：ネコと魚の出会い
：人間の食生態を探る

著者：西丸震哉

出版社：経済往来社
出版年月：1970年4月
総ページ数：292ページ



推薦者

黒川衣代

鳴門教育大学大学院教授
生活・健康系コース（家庭）

♪お魚くわえたドラ猫、追っかけて～♪という誰もが知っている歌のフレーズ。まだキャットフードなるものが一般的に出回っていなかった時代、庶民の飼い猫のエサは、魚のおこぼれか、ご飯に鰹節と醤油あるいは味噌汁をかけた猫まんまと決まっていた。ゆえに、猫の満足そうなしたり顔を連想させるこの歌詞は「猫の好きなエサは魚！」と、中学生の私を確信させてくれた。

大学で食物学科に在籍し4年になったばかりの頃、大学の生協で見つけた『ネコと魚の出会い』というタイトルの本。「猫と魚はワンセット」で頭に入っていた私は、「出会い」ってどういうこと？と妙にひっかかってしまった。もう読むしかない。

著者は「ネコの公約数的好物は魚であり、魚のなかでもアジがいちばん好きだ。魚を食べたことのないネコ、これは外国あたりにはかなり多いことだろう。」(p.4)と言う。

私は、海に面していないところでは新鮮な魚は手に入らなかっただろうと想像した。「なるほど、そうか！」と膝を叩いて「だから、トムとジェリーのトムは、ねずみのジェリーを追っかけるんだ！」と合点がいった。古来、日本でも猫はねずみを捕ることになっている。洋の東西を問わず、魚が手に入らない、もしくは入りにくいところの猫はねずみを追いかけるのだと気づいた。

さて、問題は猫と魚の関係である。著者曰く、「ネコは水泳が好きではないから、海を泳いでアジにでっくわす機会というものは絶対になかったはずだ」(p.4)、と。

猫は自ら泳いで魚を取りに行ったりはしない。ということは……。 「そっか！人間という介在により魚に出会ったんだ！」そして、海に囲まれた日本では、アジをはじめ大衆魚といわれた安価な魚類が四季を問わず豊富に捕れたから、魚が猫のエサになったのだと気づいた。

「猫の好きなエサは魚」は、猫が人間社会に入り込む以前には見られなかった現象かもしれない。「当たり前と信じていたことが、当たり前ではなかったかもしれないこと」が、私には一撃であった。自然条件、社会環境、人間やサービスの介在等のさまざまな要因が絡んで食生活が形成されることが小躍りするくらい面白くて、私は、著者が提唱する食生態学なるものに惹きつけられた。そして、その後、大学院で家族を対象とする学問領域を専攻して学び、現在はその延長線上に食生活と家族の研究を行っている。大学4年生の時に買った本は、大切な1冊として、いつも私の近くにあったし、これからもそうであろう。

若い皆さんが、乱読の中から、手放せない1冊に出会えることを願っています。

